2012 年 6 月 7 日

信楽青年寮

教育学部 3 年生

1. はじめに

信楽青年寮とは、滋賀県甲賀市信楽町にある障害者支援施設のことであり、S30 年に池田太郎氏によって設立された。今回、実際に施設を訪れて施設長のお話を聞き、見学して学んだことをまとめていく。まずはじめに実際に施設内を見学した際の様子を紹介し、そのあとで信楽青年寮の成り立ちや理念・課題等をまとめていく。

2. 施設見学

短い時間ではあったが施設内を少し見学させていただいたので、写真とともに紹介していく。

信楽焼作業所

信楽焼作品

裁縫の部屋

住居

コインランドリー

頂いた折り紙の鶴

寮にお住まいの方々と直接交流することもできたが、皆それぞれ得意な仕事があり、誇りを持って取り組んでいるように見えた。また寮と言いつつも、何棟もの建物があり、食堂もたくさんあり、本当に一般的な生活を送れるような設備が整っていると感じた。更に、外部との交流も、やりがいのある仕事と整った住居もあり、社会に出て行きやすいような環境ができていると思った。トラブルは尽きないかもしれないが、とても生き生きしていたのが印象的であった。

3. 信楽青年寮の成り立ち

まずは、信楽青年寮の現在までを簡単な年表にしてまとめる。

S27 年	4 月	滋賀県立信楽学園設立
S30 年	4 月	財団法人信楽青年寮設立
S45 年	5 月	現在の場所に、新築移転
H 1 年	4 月	グループホーム第一号、浦白荘開設
H15 年 4 月		ワークセンター紫香楽開設
H19 年 11 月		名称変更
		信楽青年寮更生部→信楽青年寮しん
		信楽青年料授産部→信楽青年寮らく
		現在に至る

信楽青年寮が設立されたそもそものきっかけは、近江学園の就業指導を担当していた池田太郎氏が、町の人々に近江学園の子どもたちを知ってもらうために数人ずつ信楽に連れてくるようになったことである。池田氏は「働くことなしに障害者の自立はありえない」と考え、基礎的な訓練を施すことによって障害者を社会に輩出することを目指していた。そこで、訓練施設の創設に向けて、障害を持つ子どもたちの特性を街の人々に知ってもらおうとしたのだ。障害者は家の中に匿っておくのが一般的であった当時の状況からすると、これは逆の発想であり、珍しく画期的なものであったといえる。

そしてそのような動きが実り、S27 年に、3 年間の職業訓練を行う信楽学園が設立された。そこで訓練や実習を行い、信楽学園の生徒たちの多くは、職を手に付けることに成功した。その後、単純な仕事を長時間継続できるという彼らの特性が評価され、町外にも働き口は増えていったが、人間関係が上手くいかず結局は信楽に戻ってくるという事態が頻発し、仕事はあっても住居がないという問題が発生した。そこで、その問題を解決するために設立されたのが、信楽青年寮であった。設立後は、公共の信楽学園と民間の青年寮が協力し

ながら活動していくという、異質だが非常に効率の良い方法で運営した。また、H1 年から徐々にグループホームも設立され、現在では信楽町に全部で 19 件存在しており、障害者の大切な住居となっている。信楽青年寮の定員は 80 名で、更にグループホームをあわせると、信楽町だけでも非常に多くの障害者の方々が暮らしていることがわかる。

4. 理念

信楽青年寮創設者である池田氏の遺稿より現在にまで受け継がれている、「障害者の方の４つの願い」は、以下のようである。

① 働きたい。
② 無用の存在でなく、有用の存在であると思われたい。
③ 皆と一緒に暮らしたい。
④ 楽しく生きたい。

このような願いを叶えるために、現在に至るまで信楽青年寮が大切にし続けている理念は、「生活すべき場所は寮の中でなく、あくまでも地域社会の中においてだ」ということである。つまり、寮において支援はするが、一生を施設で過ごす訳ではなく、暮らす・働くのは地域の中だということである。それぞれの人にあったライフスタイルを提供し、選んでもらう中の一つの選択肢が信楽青年寮であり、また、グループホームなのだ。それらの施設の役割は、一定期間鍛えて、障害者の方々が社会に羽ばたいていけるようにすることである。更に地域で働くといった意味で、寮の施設内には職場は一つしかなく大抵は外に働きに出かけるのである。

また、寮で行っているのは「介護」ではなく「支援」だというのも重要な理念の一つであるようだ。これは、職員が支援することで、障害者の方々がやりたいのにやれないようなことを達成させてあげる、という前向きな姿勢の表れである。訓練だけでは達成できないような願いは、「支援」によって達成することができるようになる。そして支援のために、就職するまでも、就職してからも、職員が関わり続けるのである。

5. 今後の課題

滋賀県は福祉先進県と言われることからも分かるように、信楽青年寮やグループホームは非常に大きな結果を残している。しかしそれと同時に、いくつかの問題も抱えるようになってきた。

① 初期の頃の寮生が年をとったことにより高齢者の人数が増えて、部屋が足りなくなっている
② 医療的なケアが必要な人々に対して、キーパーの数が足りていない

このような問題を解決するためには、

・点在したホームをいくつかまとめて助け合う
・法人の中で出来ることできないことをもう一度精査し地域と関わり合っていく
・在宅医療と病院医療の役割分担をする
といった解決策が考えられる。

6. おわりに

理念の部分で述べたように、寮はあくまでも一時的な選択肢であって、一生をそこで過ごすというわけではない。自分の求めるライフスタイルを実現するのに 1 番適しているのが、たまたま寮かもしれないし、グループホームかもしれないし、自宅かもしれない。介護をしてあげるという上から目線ではなく、障害者の方々が願いを実現するお手伝いをする、というような感覚が大切だ。一番求められているのは、「社会が受け皿になること」である。これは、信楽青年寮創設当初から全く変わらず現在まで言われ続けていることだ。全ての人が当たり前に暮らせる社会を目指していかなければならない。

実習を通して、私の中の「福祉」という概念が大きく変化したように思う。今までは、障害を持つ方々を介護して最低限の生活をさせてあげる、というような考えを持っていた。しかしそうではなく、私たちが学校へ行ったり働きに行ったり家でゆっくりしたり遊んだりするのと全く同じで、障害者の方々も自分好みのライフスタイルに合わせた生活を選んでいくことができるような環境を作ることが大切なのだと気がついた。特別な施設ではなく、町の中の一住居、一職場、と捉えるべきなのだ。

今回は非常に有意義な実習となったが、施設内の見学をじっくりすることができず、作業もお休みの日だったので、また機会があれば、もっともっとリアルな信楽青年寮を見たり関わったりしてみたいと思った。